
鏡は見ないで

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

鏡は見ないで

【Nコード】

N8307A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

中学一年の百合華達は、放課後の教室で『こっくりさん』をする。途中、『こっくりさん』の様子がおかしくなり、恐くなった未梨は十円玉から指を離してしまう。霊感の強い絵美は、未梨の異変に気付く……。

鏡は見ないで

(前書き)

真夏のホラーフェア小説参加作品です。「夏ホラー」で検索すると他の先生方の作品も読めます。

この作品はある方の実話を元に書いたノンフィクションです。登場人物名、その他細かい部分はフィクションです。

鏡は見ないで

中学一年の百合華は、放課後の教室で仲良しの未梨と絵美と、机を挟んで雑談していた。教室には、三人の他に祐介と徹しか残っていない。二人は、教室の隅で鞆を抱えたまま立ち話をしていた。「でね、この前言ったもの用意して来ちゃった」
百合華は悪戯っぽく笑うと、鞆の中から一枚の紙を取りだして机に広げる。

「あつ、これってもしかしたら……」

未梨は一瞬顔を強ばらせ、じっと紙を見つめる。ひらがなで書かれた五十音の文字と数字。隅の方には鳥居のマークが描かれている。「……こっくりさん？」

絵美は声を落として呟く。

「ピンポン！ 一度やってみたかったんだ」

百合華は明るく言うと、財布から十円玉を取り出す。

「昨日、ネットでやり方調べてみたの」

「やめた方がいいよ。『こっくりさん』は遊び半分でやっちゃいけない」

「そう言うことも注意書きで書いてあったわ。私、遊び半分じゃないもん。真剣だから」

心配そうな顔をする絵美に、百合華は笑って答える。

「ちよつと怖そうだね。でも、私もちよつとやってみたいな」

未梨は、百合華と絵美の顔を交互に見ながら言った。

「……私はやだ。もし、こっくりさんが帰らなかったらどうするのよ。誰かに取り憑いちゃうかもしれないじゃない」

「そんなことないって、ちゃんと帰ってもらってから大丈夫よ」

「いや」

絵美は首を横に振る。

「もー、絵美は恐がりなんだから！」

「あ……絵美って靈感強いもんね。この前もお祖母ちゃんの幽霊見たとか……」

未梨は恐る恐る絵美を見る。

「えー！ マジ？ そっちの方が怖いじゃん」

「とにかく、私はやらないから」

絵美は席を立って帰ろうとする。

「待ってよ。見るだけでもいいじゃない。付き合いなさいよ」

百合華は、強引に絵美の腕を掴んで座らせる。

「あ、でも二人じゃ人数少ないね」

百合華は教室を見回し、教室の隅に祐介と徹の姿を見つける。二人は喋りながら、教室を出ていこうとしていた。

「あつ、ちよつと！ 祐介！ 待ちなさい！」

百合華は祐介を大声で呼ぶ。祐介とは幼なじみで、気の強い百合華は昔から祐介を子分のように扱っていた。

「何だよ」

祐介は鬱陶しそうに百合華の方を見る。

「今から、『こつくりさん』やるの。あんたと徹君も参加してよ」

「『こつくりさん』？ 面白そうだな」

興味をひかれた徹が、祐介の代わりに答えた。

「でしょ？ 色んなことを『コツクリさん』から聞けるかもよ」

百合華は、フフフと意味ありげに笑う。

「けど、『こつくりさん』ってなんかやばくない？」

祐介は少し躊躇する。

「大丈夫だって！ 私を信じなさい」

「ちゃんとやれば、全然恐くないと思うよ……」

未梨が、徹を意識して見ながら言った。百合華はその様子を横目で見て、ニコリと笑う。

「未梨、徹君と接近出来るチャンスだね」

百合華は未梨の耳元で囁いた。親友の未梨が徹に片思いなのは百合華も知っている。

「ホントかよ……」

祐介は気乗りしなかったが、徹はサツサと女の子達の席に歩いて行き、仕方なく祐介も仲間に加わった。

「……どうなっても知らないわよ」

四人が集まると、絵美は席を立って少し離れた窓側の席に移動した。

「祐介、窓開けてきて」

百合華は、さっそく祐介に命令する。

「窓？」

「北側の窓を開けなきゃいけないの。この教室はちょうど北側だからあっちの窓でいいはずよ」

「へえ〜 何のために？」

席を立ち窓を開けた祐介は聞く。

「もちろん、『こつくりさん』が入ってくるためじゃない」

百合華は笑って言うが、祐介は少し不安げな顔をする。

「『こつくりさん』って何もんだよ……」

「いいから、席に着いて。始めましょう」

絵美は頬杖をつき、フーとため息をもらして窓の外を見る。日暮れにはまだ時間があり、空は晴れ渡っている。だが、絵美は不安だった。さつきから胸騒ぎのような、嫌な気分を感じていた。

「……本当に知らないから……」

絵美は低く呟く。

百合華と未梨と祐介と徹は、紙の上に置いた十円玉の上に人差し指を軽く乗せた。

百合華は深呼吸すると、十円玉の方を見ながら語りかける。

「こつくりさん、こつくりさん、いらっしやいましたら、鳥居のところまでお進み下さい」

四人はじつと十円玉を見つめ、動くのを待つ。しかし、十円玉は動かなかった。

「こつくりさん、こつくりさん、鳥居のところまでお進み下さい」「百合華はもう一度繰り返し返す。五人以外誰もいない静かな教室。コチコチという壁時計の音だけが小さく聞こえてくる。

「こつくりさん、こつくりさん」
百合華がもう一度語りかけた時、教室の窓からヒューと風が吹いてきた。窓から入り込んだ風は、四人の頬を撫で髪をなびかせた。それと同時に十円玉がスツと動き始める。

四人が息を呑んで見つめる中、十円玉はススツと鳥居のマーク目指して進み、鳥居の上でピタツと止まった。

百合華は緊張気味に皆の顔を見回しながら、質問を始める。

「こつくりさん、こつくりさん、質問に答えてください。構わないなら『はい』のところに進み下さい」

十円玉は、間をおかずに『はい』の文字にスツと進む。

「では、質問します。岡部の髪はカツラですか？」

岡部とは担任の教師のことだった。まだ三十代だが、前髪のあたりが不自然で、カツラだという噂が流れていた。

「おい」

喋ろうとした祐介の足を百合華はけ飛ばし、シツと小声で注意する。十円玉は迷うことなく、『はい』のところをくると回って止まる。四人は必死で笑いをこらえながらその様子を見ていた。

「ありがとうございます。では、次の質問です」

百合華は、チラリと徹に視線をやり続ける。
「徹君には好きな子がいますか？」

えっ？ という顔をする徹の目の前で、十円玉は素早く『はい』の元に行く。

「その子の名前の一番最初の文字を教えてください」

「……あ」

未梨は不安気な眼差しで百合華を見つめる。

今度は、十円玉はなかなか進まない。考えるように紙の空欄をくると回っている。

「こつくりさん、徹の好きな子はたくさんいますか？」

進まない十円玉を見て、百合華の代わりに祐介が質問した。すると、十円玉はスツと『はい』の方に進んでいった。クスクスと笑う祐介。徹はもう片方の手で頭をかいた。

百合華と未梨は複雑な様子で顔を見合わせる。

と、その時、窓から強い風が吹き付けてきた。風は、『こつくりさん』の紙をパリりとめくり、皆は慌てて片方の手で紙を押さえた。「あ……」

絵美は窓から空を見上げる。さっきまで晴れていた空に、いつの間にか黒い雲が立ちこめてきている。雲は煙のようにもくもくと広がっていった。一瞬にして、教室の中は夜のように暗くなる。

「キヤツ」

十円玉の上に指を置いていた未梨は、小さく悲鳴を上げる。紙の上を滑っていた十円玉が、僅かに宙に浮いたのだった。そして、十円玉は強い力で紙の上をスーッと移動し始める。

「未梨！ 十円から指を離しちゃダメよ！」

指を離そうとした未梨を、百合華は怒鳴りつける。

「でも、十円が……」

未梨は泣きそうな顔をする。その間も、十円玉は紙の上をクルクルとでたらめに回り続けた。そして、五十音の文字の上を滅茶苦茶になぞっていく。

「私、もうダメ！」

耐えきれなくなった未梨は、十円玉の上からとうとう指を離してしまった。その瞬間、四人の指にガクンという衝撃を感じ、十円玉はピタッと動きを止めた。

それと同時に、吹くはずのない強い風が教室から巻き上がり、『こつくりさん』の紙を吹き飛ばすと教室の窓をガタガタと揺らせた。「……………」

皆は固唾を呑んで、その様子を見守る。ようやく嵐のような強い風が去った後、黒い雲は嘘のようにひいていった。空には何事もなかったかのように青空が広がる。

未梨は、恐怖のあまりシクシクと泣き出した。

「……な、なんだよ、今の」

祐介も青い顔をしている。

「どうしよう……」『こつくりさん』をちゃんと帰らせなかったよ

流石の百合華も心配になってきた。

「帰らなかつたら、どうなるんだよ？」

徹は百合華に聞く。

「それは、私もよく分からない……ねえ、絵美」

百合華は窓辺に座っていた絵美に泣きつく。

「だから、やめなさいって言ったのに！」

絵美はムツとした顔で四人を見る。と、絵美の顔が凍てついたように固まった。絵美はじつと未梨を見つめている。

「未梨……」

「……え？」

涙を手で拭いながら、未梨が顔を上げる。

「……あのね」

絵美はゴクリと唾を飲み込む。

「今日は絶対、鏡を見ちゃダメよ……」

「え？ 鏡？ 何故？」

目を赤くした未梨は、きよとんとした顔で絵美を見る。

「だって」

目を大きく見開き、青ざめた顔をした絵美は、ガタンと椅子から立ち上がる。

「とにかく、今日だけは絶対見ないで！」

絵美はそう言つと、まっしぐらに教室から走って出ていった。

「え？ どういうこと？」

絵美の後姿を見ながら、未梨は途方にくれる。

「私、何か変？」

「うっん、何ともないよ」

百合華は答える。未梨はいつもの未梨で特に変わった様子はない。

「あいつ、また見たんじゃねえの？」

「えっ？」

未梨は怯えた目をする。

「だから」

「馬鹿！」

百合華は祐介を睨み付けると、彼の足をけ飛ばした。

「テッ……」

祐介は足をさすりながら、言おうとした言葉を飲み込んだ。

「気にすることないよ、未梨。でも、ま……今日は鏡見ない方がいいかもね」

百合華は不安を感じながらも、笑って言った。

靈感の強い絵美のこと。本当に何か怖い物を見たのかもしれない。未梨はそう思い、絵美に言われたとおり、翌日まで鏡を見ないようにした。帰れなかった『こっくりさん』に取り憑かれてしまったかもしれないのだから……。自分でも気になっていたが、なるべく考えないようにした。

部屋の鏡はもちろん、家中の鏡も見なかった。お風呂にも入らず、髪もとかず、歯も磨かないで、サツサとベッドに入った。

良かった。これで明日もう一度絵美に見てもらえば良いわ。

未梨は安心して目を閉じた。

真夜中過ぎ、部屋の窓がガタガタ言う音を聞いて、未梨はふと目を覚ました。その夜は風もない静かな夜。二階の窓が揺れるはずはない。

不思議に思っていると、また窓ガラスがガタガタと鳴った。

特に恐怖心はなく、その音は普通に風が窓を揺らせているような感じの音だった。それでも、少し気になった未梨は、部屋の明かり

鏡は見ないで

をつけ窓のカーテンをサツと開けた。

「ギヤァー!!」

未梨は凄まじい悲鳴を上げる。窓には顔が映っていた。窓ガラスが鏡のように、鮮明に未梨の姿を映している。顔はじつと未梨を見つめ返す。それは、いつもの未梨の顔ではない。ガラスの中から不敵な笑みを浮かべたその目が光る。その顔の正体は　　！　　完

(後書き)

いかがだったでしょうか？

実際のお話では、「鏡を見ないで」と言われた子は鏡を見ずに過ごして無事だったようです…(^^;)もし、見ていたら何が映っていたか分からないんで、ああいう終わり方にしました。『こっくりさん』は恐いです。私は一度もやったことはありません。皆さんも興味本位で遊ばないようにして下さいね。

鏡は見ないで

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8307a/>

鏡は見ないで

2009年6月16日15時46分発行